

# ご近所の お医者さん

□  
632  
□

おく内科・  
在宅クリニック院長

奥知久さん

＝大阪市旭区

## コロナが見せる疎外と絆

「先生、近づかないで。私、感染者  
ですよ?」

22歳の恵子(仮名)さんは、私に向  
かって言いました。恵子さんは1歳と  
2歳のお子さんがいるシングルマザー  
で、母子3人とも新型コロナウイルス  
に感染し自宅療養を余儀なくされてい  
ました。当時は第5波の真っただ中。  
救急車や病

院、保健所  
もそれぞれ  
業務が逼迫

しており、まさに医療崩壊ともいえる  
状況が起きていました。転居したばか  
りの若い親子のもとには、届くはずの  
食料も届かず、周りに助けを求めるこ

## 先生、私、感染者ですよ?

ともできずで、「何もないから白米だ  
け子どもたちに食べさせています」と  
のことでした。この令和の時代になん  
と寂しいことでしょうか!

コロナ自宅療養往診チーム、K I S  
A2隊(きさつたい)大阪を結成し「一  
人でも多くの命と心を救いたい」とい  
うミッションを掲げていた私たち。恵

子さん親子になんとか手を差し出した  
くて、ボランティアさんたちが集めて  
くれた食料に、少しの野菜とアイスク  
リームを加えてマンションに届けに行  
きました。

喜んでもらえるかな?とと思って食材  
の入った箱を玄関の扉の外でお渡しし  
ようとしたのですが、その時、「先生、  
近づかないで!」と言われたのです。  
「フラれたっ(悲)!!」という青春時

代をほうふつとさせるシーンの後、恵  
子さんの口から出てきたのが「私、感  
染者ですよ?」でした。

なんと悲しい言葉でしょう。コロナ  
は体以上に恵子さんの心や、つながり  
に深く傷をつけていると思えました。

「お母さん、右手を出してみて」。  
恵子さんが出した手をしっかりと素手  
で握ることにしました。「お母さんが  
けがれてるとちやうよ。ウイルスが  
いま体に取り付いているだけや」。恵子

さんの目が  
少し和らい  
だが見え  
ました。「で

もな、お母さん、ちょっともう一回手  
を出して」。持参したアルコールでお  
互いの手を消毒しました。「こうやっ  
たらな、ウイルスはいなくなるんやで。  
1週間たったら絶対消えてなくなるか  
らな。だからそれまで頑張ろな!」。  
そうやって家を後にしました。  
これからもコロナに負けず、人の絆  
を胸に持って、生活を送っていただけ  
ますように。

